

(低)→低学年、(中)→中学年、(高)→高学年

■児童・生徒の学力の状況

- ・学力差が大きく、学習習慣及び基礎的・基本的な内容の定着に課題がみられる。(低)
- ・算数や国語を中心とした基礎学力の定着が十分ではなく、知識を活用して問題を解決する力の育成が課題である。(中)
- ・国語の「読むこと」における思考力・判断力・表現力や、算数の「変化と関係」において数量の関係を捉え、立式・説明する活用力に課題がみられる。(高)

■授業革新推進に向けた、指導上の課題

- ・一人一人の学習状況に応じて、「すららドリル」等のICT教材を活用し、個別最適な学びを通して基礎的・基本的な内容の定着を図る。(低)
- ・基礎学力や読解力の定着を図るとともに、体験的・探究的な学習を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育成する授業を充実させる。(中)
- ・要約や根拠を明確にした記述指導を充実させるとともに、関数の考え方を活用して立式・説明する活動を計画的に取り入れ、活用力の向上を図る。(高)

■学校経営方針より（学力向上に関わる内容から）

- 毎時間の「めあて」と「まとめ」を確実に位置付けるとともに、振り返りを通して自ら学びを見直し、次の学習につなげる自己調整学習を充実させ、主体的な学習者を育成する。
- 文章の要点を捉える力や数量の関係を立式する力などの基礎・基本の確実な定着を図るとともに、習得した知識・技能を活用して筋道立てて説明する問題解決的な学習活動を推進する。
- 「板橋区授業スタンダードS」に基づき、児童が学習方法や表現方法を自己選択・自己調整しながら、協働的に学びを深める授業づくりを推進する。

■確かな学力の育成に向けての具体的な方策

視点1

板橋区授業スタンダードの徹底、及び板橋区授業スタンダードSの取組

- ・自己調整学習を充実させるため、学習内容とともに学習方法を提示し、児童が自ら学び方を選択・調整する場面を計画的に設定する。
- ・「めあて→自力解決→対話→まとめ→振り返り」の授業展開を全学級で徹底し、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。

視点2

ICT環境の適切な維持と活用
個別最適な学び・協働的な学びの実現

- ・一人一台端末やAIドリルを効果的に活用し、各児童の理解度や学習状況に応じた個別最適な学びを充実させる。共同編集や発表資料の作成等を通して、児童が互いに考えを共有・協働しながら学ぶ活動を計画的に取り入れる。
- ・情報モラルや情報活用能力の育成を図るため、リテラシー教材等を活用し、全校で系統的な指導を実施する。

視点3

総合的な学習の時間との連携

- ・相手意識や目的意識を明確にした学習活動を通して、児童の当事者意識を高め、主体的・協働的に課題を解決する資質・能力を育成する。
- ・コミュニティ・スクールの強みを生かし、地域・保護者・関係機関と連携した探究的な学習を充実させ、実社会とつながる学びを推進する。

■MIRAI SCHOOL いたばし-教育ビジョン2035- -アクションプラン2028-の実現に向けた具体的な取組

保幼小接続・小中一貫教育の推進

- ・1年生ではスタートカリキュラムに基づき、4・5月は40分授業を取り入れることで、ゆとりをもって指導を進めることで、学校生活に慣れ親しめるようにする。
- ・幼保中と「児童の実態」「育てたい資質・能力」を共有し、学習規律や学び方（話の聞き方・ノートまとめ方・話し合い方、情報活用能力）を系統的に指導する。

豊かな心と健やかな体の育成

- ・年間2回、ふれあいアンケートや、思春期の入り口である5年生へスクールカウンセラーによる全員面談を行い、児童の悩みについての聞き取りと解消に取り組む。
- ・土曜授業プラン及び道徳授業地区公開講座や学級活動の日を通し、授業の様子を保護者に示して共有したり、講演会を行ったりすることで、共通理解を図る。
- ・各学年の生活・探求の年間指導計画に福祉を位置づけ、計画的に指導を進める。

多様な教育的ニーズへの対応

- ・学力差については、習熟度や興味の方角性に応じて、学習課題に選択の余地を設けたり、評価規準を示したりすることで学習への主体性を刺激する。
- ・漢字や四則演算など基礎基本の反復学習を継続するとともに、AIドリルやICT教材を活用して個別最適な学習を行う。
- ・学習支援員、特別支援教育、日本語指導員、iCSを通じた保護者ボランティアなど、児童の状況や活動内容に応じた教育手段を確保し、柔軟に対応する。